

---

# 眠たいあたしと乙女なアイツ

まほろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

眠たいあたしと乙女なアイツ

### 【Nコード】

N5143P

### 【作者名】

まほろ

### 【あらすじ】

高田楓、17歳。高校2年生。成績、どっちかっっていえば良い方。顔、まあ10人中8人は可愛いって言うかも。そんなワタシは眠たがり。授業中も、帰っても、休日も暇さえあれば寝てる。もしくはラノベとゲーム。そんなけっこう女として終わってるワタシに告白してきたやつがいた！！それがあいつ山崎千夏。いまはやり（？）の乙女なメンズ。ワタシよりずっと家庭的？！料理だって裁縫だっってお手の物。そんな千夏とワタシのつれづれな日々。

## 一話

高田楓、17歳。高校2年生。成績、どっちかっていえば良い方。顔、まあ10人中8人は可愛いって言うかも。そんなワタシは眠たがり。授業中も、帰っても、休日も暇さえあれば寝てる。もしくはラノベとゲーム。

そんなけっこう女として終わってるワタシだが、つい最近彼氏ができた。いやつい最近というのは少し語弊があるかもしれない、なんとなく告白されたのは今日の昼休み。そして今は放課後。いつもはさっさと帰るワタシが今日に限ってちょっと待ち合わせなんてやっぱ浮かれてる。顔のわりに今まで異性につきあったことがないワタシは当然処女である。

そんな奇特な男のの名前は山崎千夏。女のワタシよりずっと乙女だ。趣味は料理と裁縫、部活は手芸部だが文化祭などの時期になると調理部にも助っ人として参加するらしい。なんでらしいのかというと、ワタシが直接聞いたわけではないから。つきあうことになったと言ったら周りがいろいろ教えてくれた。

あだ名はちなくん、少したれ目（ここ重要）のちよつとかかわいい系。そう、ワタシは何を隠そう大のたれ目フェチ。好きな芸能人はみんなたれ目。好きなキャラクターもたれ目。彼の告白を受けたのもたれ目のバランスがよかったからと声がきれいだったから。

ああ、そんな風にぼーっとしているとあいつが迎えに来た。ワタシの好みの声で、ワタシの好きな目で、ワタシのことをやさしく呼ぶんだ「楓さん、一緒にかえりましょう」って。

ホントにズルイ。

## 二話

今日もアイツはお昼になるとやってくる。アイツのお手製弁当をこ  
れまたお手製の弁当袋に詰めて。ワタシの分とアイツの分、二つの  
弁当をひっさげて。

「楓ちゃん、お迎えだよ!!」

とはワタシの友人である花ちゃん。名前のようにふわふわしてちっ  
ちやくて可愛いいかにも女の子。そして主人公体質（これ大事）。  
よく漫画みたいな話とか冗談で言うけど、この子は地でそれをやっ  
てる。天然のどじっこで、嘘がつけなくて、すぐ赤くなる。男から  
の好意に鈍感で「わたしなんかもてないよう、楓ちゃんはいいなあ、  
頭がよくて背が高くて美人だし」とかふつうに言ってる。別に花み  
たいになりたいわけじゃ無いけどたまに苛つとくるときもある。良  
くも悪くも鈍感、それが花。

「楓さん、迎えにきたよ。早く食べよう」

とかいろいろ思ってたらしびれを切らしてやってきた。

「今日のご飯は豚のシヨウガ焼きと温野菜のディップと自家製スモ  
ークチーズだよ。」

と言う。どうでもいいけど自家製スモークって何だ、家でスモーク  
したら近所迷惑じゃん。

いつも食べる場所は決まってる。屋上に続く階段をさらに上ると小  
さな踊り場がある。そこに彼が持ってきたタオルケットを敷いて食  
べる。会話はどちらかが今日あったことを順番に話す。騒がしくな  
いこの時間がすき。

「何でワタシなの??」

ふと思いついたことを聞いてみる。すると彼はワタシの好きな笑顔  
で言った。

「楓さんが楓さんだから好き、寝てるとき、眠いのにな死に起きよ

うとしてるとき、ご飯を食べてるとき、楓さんの笑顔、声、泣いた顔、驚いた顔全部、楓さんの一部だと思うといいとおしいと思う」

なんて大まじめな顔をして言うから・・・。

いまきつとまっかだと思う、恥ずかしかった、でもそれ以上にうれしくて、いとしくて心がほっかりした。

「ワタシも好き」

何がなんて言わない、だってキミならわかるはず。

「どうしようすごくうれしい、・・・キスして良い??」

良いつて返事をする前に口をふさがれてた。

気持ちを確認して絆が深まった、ある晴れた五月の日。

### 三話

ワタシの友達である花は可愛い。

それは周知の事実だし、ぶっちゃけもてる。

小さな身長、ふんわりとした柔らかい髪、大きい目にふくふくのほっぺ、男からしたら庇護欲をそえられること間違いないだろう。

勉強は凄く得意じゃないが家庭科はいつも5段階中5をキープ、調理実習なんかも率先してやる。

用は、すぐ家庭的。お嫁にほしくらいだ。

だが彼女にも欠点はある、まあワタシがたまに思うだけなんだが。悩みがあるのにもかかわらず、人に相談しない。そして自分で勝手に負のループにはまってしまう。

勝手にくだらない事で悩んで（本人はくだらなくないらしい）周りが気づいたときには結構大事になってる。

ほら、今もそう。

「おい！！なんでこんなになってんだよ！！」

と叫ぶのは彼女が好きな野郎その1、藤枝である。さわやかなサッカー少年である。

「うーん、これはちょっとひどいね」

とは軟派なチャラ男、牧田だ。

「あはは、ばれちゃった。ごめんね、心配かけると思って」

とは言わずもがな、花である。

どういう事態かと言うと、花は高校に入った時から好きなやつがいる。そいつがまた周りから「王子」なんて呼ばれてる男で泣かされ

た女は星の数、そんなら抜け駆け禁止でみんなで愛でようみたいな男。

そんな「つきあったら女子から反感買いまくりのヤロー」の名は榊、歩く疫病神に花は片思いしていた。

それだけなら良い、だが二人の仲は進展してしまったのである。

きっかけは放課後の図書館なんてヘタキュービッドはお菓子のレシピ本。

寝ていた榊氏がふと起きると、届かない手を精一杯伸ばして本を取ろうとする花を発見、「なんか一生懸命で可愛い」なんて思った榊氏は普段はまっつたく無いフェミニスト心を発揮、代わりに本をとってあげようとするもキツキツにしまつてあつた本棚からはバラバラと本が……。

みたいな感じで出会つた二人、花はあこがれの人といられるのがうれしくて、また榊は花の飾らない性格や優しさにだんだんと惹かれ・・。

そして二人は距離を縮めていったが、こういうラブコメにはお約束の「いじめ」がある。

まあ要するに、今までは陰口くらいで済んでいたのにととうとう実力行使が始まつたというわけ。

前置きが長くなつたけどそういうこと。

「おい！！おまえなんでさつきからだまつてんだよ！！ダチが困つてんのみてなんかねえのかよ！！」

はあ、矛先がこっちに……、面倒くさい。

「藤枝君、私が悪いの！！楓ちゃんが悪くないの！！」

「でもさ、これ見て何の反応も無いってヒドクね??」

「あのさあ」

三人がワタシを見る。

「ワタシ、怒ってるんだよね。」  
そうワタシは怒ってる。

「まずは花」  
「は、はい」

「なんでここまでいつちゃう前に助けを求めないの??」  
そう、私たちには口がある。心に傷を負う前になぜ助けを求めない。自分の力量を把握して出来ることと出来ないこと見極めるのは大事なこと。それが出来なければ社会に出てても仕事は出来ない。

「さらにその馬鹿二人」  
「お、おう」

「自分のファンくらい裁きなさいよ」  
この二人を見てると明らかに花を優遇してる、これをやった中には二人の事を好きな女の子たちも入るだろう。  
自分の何が悪いのかわからず、好きな人がこぞって一人を優遇していたら怒るだろう。

「そして榊」  
アイツは問題外だ、特定の一人を作るならそれまでの関係をきちつと清算しやがれ!!



「最後はワタシ」

そう、何にも相談してこない花に勝手に拗ねて、いじめに気づいていたのに見て見ぬふりをしたワタシが一番最低だ。

もう最悪、どんなにテストの成績がよくてもこれじゃダメじゃん。

どうしよ、もうなきたい・・・。

「ダイジョウブだよ」

体が支えられる。暖かいぬくもりがワタシを包む  
ああ、ちいだ。

「ダイジョウブ、みんなで考えましょう」

ちいのこえは安心する。ちいに言われると素直に自分の非を認められる。

「とりあえず楓さん、泣きやんで下さい」

「ええつつ楓ちゃん泣いてるの?!泣かないで!」

あ、花が焦ってる。でもどうしよ、止まらない。

ちゅ

「!?!」

「はい泣きやんだ」

ニコツと笑うキミの顔は好きだけど

「馬鹿つつつ」

少しの文句は許される???

どんどんキミの魅力にはまるワタシはどうしたら良いのかな???

(なあ、おれら忘れられてる???)

(シッ、いまいところ!?!)

(邪魔しちゃだめだよ)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5143p/>

---

眠たいあたしと乙女なアイツ

2010年12月25日22時52分発行